# エピローグ

## 本書の意味

本書を

佐下谷武司君

森下重好監督

飛永　照先生に捧げる

五十年前、兵庫県の新設五年目の公立高が旋風を起こした。それも九人ギリギリの小チーム。
目立った選手もいないオール二年生のチームは、負けないことから、〝尼西ミラクル〟と呼ばれた。

「甲子園は三回チャンスあったけどな。
出たのは、センバツの一回だけか。
大したことないな。二、三年の夏に連続準優勝や言うても、中途半端やで。
いや、私学の強豪校に勝ったのは事実や」

主将の私ですら〝尼西ミラクル〟の謎が解けないまま半世紀が経った。

その間、私は小学校の教師も定年退職した。
当時の野球部長が、
「君達がセンバツ（第四十一回）に出て五十年。記念に甲子園で地元を応援しよう」と集まったのが、本書のきっかけになった。

「結束すれば、H高に勝つ公立高が出来るかも知れない。私の夢のまた夢よー」
と中学の恩師から言われて、〝半端ない個性〟が謎を解くカギと知った。
当時、兵庫県の甲子園への切符は、私学高が占めていて、中でも逆転で有名なH高は、私たち野球少年の憧れだった。
夢のまた夢！　それを尼西は叶えた。

―ひとつー　（誰にも負けない自分）

〝個性”に焦点を当てて本書を書き進めると、誰もがチームのナンバーワンになることに躍起で、他人の意見に傾聴することは無い。
カントクさんが言い放った、
「自分で考えろ！」
をきっかけに、自分しかできない自分磨きの野球が始まった。
〝走る・攻める・守る”とか〝打順と守備”と多面的に思考を練った。

捕手の私は、打者の心理面に興味を持ったことを思い出す。我が強いみんなは、自分の努力は表面に出さないが、
「走りは負けん。
バントは任せろ」
自分で云い出した。誰にも負けない自分を見つけると、他人の良さが理解できた。

「アイツは気合だけでもフルスイングや」と私も認めて貰った。
頑固な性分が、誰にも負けない「自分」を作り上げた。
その九人がナンバーワンからオンリーワンで集まって、
「大きなひとつの力」にチームは変わっていった。

「負ける気がしないー」気持ちが宿った時、憧れの学校を破った。

―負けない尼西野球―
〝非力な打線〟はナイン自身が知っている。全員で一点を取る野球に執着した。しぶとく三人組でワンチャンスを掴むと、必死につないで物にした。一点をもぎ取ると、
「勝ったどー」ナインは円陣で叫んだ。

〝鉄壁な守備”を監督さんが鍛え上げた。私には、野手の気迫が今も迫って来る。
「頭で止めたる。
俺の処へ打たせろ。
任せろ」
投手は九人のチームには贅沢だが二枚の投手を起用し、
「春までに球種を一つ増やせ！」
寡黙で鬼の形相のカントクさんは、用意周到だった。

〝試合運び”は、
「どんな相手でも僅差の勝ちや。
相手チームは敗けた気がせんやろ」
応援席から聞こえてくる。尼西は嫌らしい勝ち方しかしない。

時には、押し出し、時には美技で守り抜いて勝った。選手が自分の役割を果たすと勝利が付いてきた。

―ヒーローなんかいらんねんー（本書の意味）

尼西高の勝利は、新聞の一面を飾らない。

派手さが無くて、見出しにならない。コールド勝ちやサヨナラ勝利はない。

銭湯仲間の近所のハヤシさんはもちろん、親戚さえ、勝ち進むのを知らない。気づけば、

「あれ、尼西高勝ってるやん」

「同じ高校生がする野球や。

負けなかったら、勝てるんや。

俺達には、一点で十分や」
頑固なまでに自我を通した園児が、とうとう高校球児になった。

本書を終えるころ、
「俺達にヒーローなんかいらんねん。普通の高校生が地元の高校で甲子園に出たんや。
これって“ザ、高校野球！”ちゃうんか」
五十年経っても、図々しく自分探しをやるナインの顔が覗いている気がした。
個性を磨き、それぞれの個性を伸ばすのが、森下監督さんの手腕に違いないかった。
〝尼西ミラクル”は偶然ではなく必然的に起きた。